

## 平城遷都の理由に関して

鍋 田 一 ☆

On the transfer of the capital to HEIZEI (NARA)

Hajime Nabeta

### 1 平城遷都の理由に関する諸説

和銅3(710)年3月、平城に遷都がおこなわれたが、持統・文武朝にわたって経営の努力が続けられた新益京（いわゆる藤原京）の経営を放棄して平城京の造営に転じていった理由については、その間の事情を明示する史料が存しないままに、従来さまざまな推測が試みられてきた。それらの諸説が言及されるところは多岐にわたっており、限られた紙数のうちにその全容を究めることは不可能に近いが、最小限諸説が指向されているところの摘要をおこなっておきたい。

喜田博士は、京城が大和三山にかこまれていて狭小である。その位置が奈良盆地の東南隅に僻在していて交通がきわめて不便であり、中央集権の実があがって中央と地方との交通が頻繁になると、僻在の地は中央政府の所在地としては不適当となった。この地は大化以来いくたびか忌避せられた飛鳥勢力の圏内にあり、新益京は本来新旧の妥協のうえに成立した姑息的なものであって、発展的な時代の要請に対応することができなかった。その地勢も北に開けて南に山を迎え、天子南面の相にふさわしくなかった。中央集権を強化してゆくうえで、飛鳥の旧勢力、とくに諸大寺の圧力を避けることが必要であった。旧代の難波遷都あるいは近江遷都に関して、藤原鎌足がこれに与かって力があつたことは疑を容れないが、飛鳥を去って自家の勢力をかため、理想の新政をおこなおうとするのは鎌足以来藤原氏の方針であつたと考えられ、その子不比等の代になって、女宮子が文武の夫人となり、妻橘三千代が後宮の実力者であつた、そのような優位を背景に、不比等が鎌足以来の政策を継いで、難波や大津のように遠くは離れず、同じ奈良盆地のなかにおいて遷都の計画をめぐらした、と推察されている<sup>1)</sup>。

喜田博士の所説は、より具体的な論証を敷衍されておられぬ点に批判はあるものの、遷都の理由の概要を示されたものとして容認され、以後の諸説は、喜田説を基本におきつつもさらに詳細に、またより広い視野のもとに考察を提示する方向で進められてきたといつてよいであろう。

大井氏は、藤原京の経営には大化の理想を標榜して当初より周到な計画をもっておこなわれるべきであつたにもかかわらず、一再ならず設計の変更らしきものが推知される。すなわち、第1期（持統

朝)の藤原京を基幹として、第2期(文武朝)に左・右両京を伸張増幅したものと推察される。藤原京は、企画の不十分により第1期・第2期の造営となり、ことに大宝以後の修正増補が顕著であったのは、当事者の設計の拙劣というような技術的なものではなく、国力の基本的な脆弱性・後進性を露呈したものとみるべきで、かえって大宝以後の京の整備こそは、都城経営の意欲を強く発揚した証左と解される。大宝以後における京の修正は大宝令の精神を具現することにあったが、修正はあくまで修正であり、都城としては増補に増補をかさねた不完全なものになり了った。その行きづまりを打開し、京師を修むる大化の理想を完全に実現するためのあらたな施策が平城京の建設(遷都)であった、とされている<sup>29)</sup>。

坂本博士は、「慶雲年間の全国的に飢疫に驚き、それに対応しようとする措置ではなかったか。遷都に攘災招福的な呪力を認めての行為ではなかったか。それとともに、古来行なわれた一代ごとの遷都への執着も再燃したのではないか」、遷都を「古代人はもっと精神的な意味で考えていたのではないだろうか」、とされている<sup>30)</sup>。

林氏は、「平城遷都の主要な要因は、不改常典の実現の方策というところに存在し、これを強力にしかも安全に遂行することが藤原不比等の願望であり、且つ天智系の元明天皇をも巻き込んだ形で進んでいったものである。」とされ、不比等は、平城に都城を経営することについては、一定の目的をもってきわめて積極的にこれを主導し、自己の添上の別邸ないし関係寺院の西隣接地に宮城を誘致したのではないか、(平城宮の東張り出し部分は東院や東宮が存在した可能性が強いが、不比等は自邸のかたわらに、その女宮子が生んだ首皇子を置き、終始自身の目で、この皇太子候補として天皇候補の成長をみ護る、という理想的な形をとろうとしたのではないか)、とされている<sup>31)</sup>。

八木氏は、藤原京は浄御原律令の実施にもとづく律令国家の最初の京であったが、平城京は大宝律令にもとづく律令国家体制の完成として、中国的王城を実現する必要がある、第七次遣唐使の帰国報告が、藤原京の改修に、ついで平城京の造営に発展していったのはそれほど不自然ではない、とされ、より宮廷的・現実的な要因として、首皇子即位のための、そしてそれに随伴する外祖父藤原不比等の地歩を決定的に強化するための、すぐれて政治的な体制づくりにほかならなかった、とされている<sup>32)</sup>。

上田氏は、慶雲期にあらわれた大宝律令体制の動揺を鎮静化する方策として、藤原不比等が主導したのが遷都の計画であり、第七次遣唐使の報告は、不比等ら首脳部の遷都への想いに拍車をかけ、不比等は遷都を実現してかれの実力を示し、新政の実をあげるとともに、首皇子の将来をおもいはかつての深謀があった、とされている。

村井博士は、遷都一般について、宅地班給をとまなう遷都とは、旧勢力からの離脱といった消極的なものではなく、むしろ積極的に諸勢力を新都に収容し、新しい体制のなかに編入するという機能をもつ、すなわち官人体制の創出に深くかかわる政治的意義をもつ行為であった、とされ、藤原京の整備は藤原不比等にとって、「持統に対する政治的協調であつたばかりでなく、それを進めることが覇権への捷徑であつた」のであり、藤原京の整備がなお進行中であつたにもかかわらず、慶雲4年に遷都のことが議せられているのは、「不比等が藤原京の整備よりも新京の経営をと、決断したことであ

らわれと見たい」とされている。

岸博士は、「平城遷都が死の穢れの問題とは別に、元明の即位と一体的なものとして計画されたのも事実であろうが、それを必然的ならしめたものは、やはり大宝律令の制定を契機に、急速に成長しはじめた中央集権の日本古代国家にふさわしい首都を建設しなければならないという政治的欲求であろう。そしてそれを主導したのは……藤原不比等とみるのが正しいであろう」とされている。

直木博士は、藤原京は、その京城の画定に古道（中ツ道・下ツ道・横大路・山田道）を利用していることが象徴するように、従来の伝統を断絶したうえに成立しているのではなく、それを十分に生かしたものであり、また、唐律令をいまだ全面的に受け入れるにいたっていない時期に建設されたものである。とされ、唐律令を全面的に継受して制定した大宝律令の施行後、政府——その中心人物は藤原不比等——は、新しい政治の中心となる首都を、難波遷都および近江遷都の失をふまえて、飛鳥・藤原よりできるだけ引き離しながらも、大和国内に求めた。平城の地は、奈良盆地のなかであるから、全くの新天地とはいえないが、その歴史的環境は、飛鳥・藤原の地より単純で新しい政治をおこなうのに適しており、京城の画定にも古道の一部をとりいれながら、なお以外の要素を利用することが可能であった。それは伝統の尊重と改革の推進とをほどよく調和させる性質を有していた、とされている<sup>9)</sup>。

以上の摘録は、簡約にともなう欠漏をまぬがれがたいが、しかし所説の力点についてはほぼふれることができたのではないかと思う。これらの諸説を通じてうかがい得ることは、遷都の理由が単一の動機や原因にもとづくとはみなしにくく、さまざまな要因が複雑にかさなりあっていると推察されている点であり、諸要因のうちのいずれをより重くみるかによって、論及に濃淡が生じているということである。

## 2 飛鳥・藤原よりの離脱

飛鳥・藤原より離脱しようとする試みは、平城遷都より以前に二度おこなわれたが、そのいずれもが短期間で終焉している。

（難波遷都） 蘇我蝦夷・入鹿父子を滅した乙巳（645）の変後成立した葛城（中大兄）皇子・中臣鎌足をふくむ新政権は、その拠を難波に移した。『日本書紀』は孝徳紀・大化元（645）年12月癸卯条に「天皇遷都難波長柄豊碕」と記しているが、さらに同紀・白雉2（651）年12月晦条にも「於是、天皇從於大郡、遷居新宮、號曰難波長柄豊碕宮」と伝えているから、難波遷都は決行されたものの、新宮に正式に遷居するまでの間は、難波に存在した諸施設を急遽改造して利用する（大郡宮など）という変則的な遷都であった。

新しい政治体制の創出をはかった新政権は、蘇我氏ら旧勢力の地盤となっていた飛鳥の地を離れることによって、より決定的な効果を狙ったものと考えられるが、その離脱は、当面する内政と外交および軍事の諸課題に対応してゆくための最適の地として難波を選んだことを意味している。

難波遷都によってもたらされる内政への効果として新政権が企図したものは、蘇我本宗家の滅亡によって生じた外廷機構掌握の機を積極的に活用して、内廷と外廷の統合を実現することではなかったかと考えられる<sup>10)</sup>。宮室の構成を改変し、外廷を内廷に隣接させる配置は、新しい体制の具体的表現であったが、同時に、古代氏族を京師に集結させることによって、律令官人化を促進させる効果も期待されたのであろう<sup>11)</sup>。

また、外政に関しても、7世紀なかばにおける唐の半島情勢に対する積極的介入は、唐・半島三国・日本間の関係に大きな緊張をもたらし、形勢はきわめて流動的となったが、それに処する外交さらには軍事的対応を強化するために、ほとんど唯一の立地条件をもつ難波へ進出することは充分に理由のあることであった。

しかし、新宮完成の翌白雉4(653)年、葛城皇子は倭京遷都を奏請して孝徳天皇と対立し、皇祖母尊・皇后らを奉じて飛鳥に還った<sup>12)</sup>。おそらくは対外政策に関する見解の対立が因であろうが、のちの葛城の行動を考慮するとき、ふたたび内陸へ宮室を後退させ、防衛の体制に意を注ぐ方向を選んだと解することができよう<sup>13)</sup>。外交の積極的展開に至当の地として選ばれた難波であったが、国防の見地よりすれば臨海という弱点を有するとされたのであろう。飛鳥よりの第1次の離脱(難波遷都)はわずか9年間にして終った。

(近江遷都) 天智称制2(663)年8月、百済救援に派遣された日本軍は、唐・新羅軍と白村江において対戦して敗北し、半島から撤退した。多数の百済人が日本に亡命する一方、亡命百済人がもたらした軍事技術を活用して、国内の各地に山城をはじめとする防衛施設が築造された。そのような軍事的緊張が続く天智称制6(667)年、近江大津に遷都がおこなわれた<sup>14)</sup>。近江は難波と異なって内陸に位置し、しかも東海・東山・北陸諸道に通ずる交通の要衝にあり、また、淀川水系を通じて瀬戸内海とも結ばれている点で軍事的拠点とするのにふさわしい条件を有していたといえる。亡命百済人を多く住まわせたのも近江であった。

天智天皇の近江遷都の意図と意義は、もっぱら軍事にあったといっていよいであろう。難波より飛鳥に還り、一転して近江に遷っているのは、国防という一線に貫かれている。対馬より大和にいたる諸防衛施設の構築をふまえ、戦略的構想にもとづいたものであることは否定しにくいであろう<sup>15)</sup>。しかし、遷都の要因が、このような対外的な問題にあったことは、一般の人々に、遷都の必然性を納得させるにたる充分な理由とはならなかったようである。『日本書紀』は「天下百姓、不願遷都、諷諫者多、童謡亦衆、日々夜々、失火処多」と記しているが<sup>16)</sup>、遷都にこめられた当事者の意図が理解されなかったばかりでなく、むしろ強い反撥を招いている。

近江遷都は天智の死後、間もなくしておこった壬申(672)の乱によって否定される結果となり、再度王都は飛鳥に還った。壬申の乱に勝利を収めて倭京に戻った大海人皇子は翌673年2月、飛鳥浄御原宮に即位して天武天皇となった<sup>17)</sup>。天武天皇の政治の主眼は、天皇を頂点とする律令体制の確立にあったとされるが、即位5(676)年にいたって、新政の一環を占める新都の経営に着手した<sup>18)</sup>。天武期における新都の構想は、大和のみならず畿内さらには信濃にまで適地を求めるといふ壮大なもので

あったが<sup>19)</sup>、それはついに実現せず、終局は、飛鳥の北西に展開する地域をふくめた、拡大された飛鳥ともいうべき京師の造営に力を注いだのである<sup>20)</sup>。天武期末年（おそらくは即位13年以降）に開始された新都の造営工事は、間もなくして天皇および草壁皇太子の死に遇して中断を余儀なくされ、鸕野皇后の即位（持統天皇）をもって再びおこなわれることになった。すなわち、新益京（藤原京）の経営がそれである。しかし、天武・持統・文武の三代にわたって継承された新都の経営は、先説が指摘されるように、飛鳥に形成された伝統と革新との妥協ないし均衡のうえに展開するという性格を帯びており、革新の確立という観点よりすればなお微温的という限界を克服しえなかったといえよう。飛鳥・藤原よりの離脱は、国家体制の新たな展開において、旧時とは異なる意義を具えた課題として厳存していたのである。

### 3 新益京（藤原京）

新都（新益京）の造営は、持統4（690）年10月に太政大臣高市皇子が、同12月には天皇みずからが藤原の宮地を視察することによって再開されたと考えられる<sup>21)</sup>。翌5（691）年10月、新益京の鎮祭がおこなわれ<sup>22)</sup>、同年12月には諸王・臣に京内の宅地班給が詔された<sup>23)</sup>。ついで6（692）年正月に天皇は新益京路を觀ているが<sup>24)</sup>、この時点で新益京の骨格をなす道路の敷設が一定の段階に達したことが予想される。同年5月に藤原宮地の鎮祭がおこなわれ、伊勢・大倭・住吉・紀伊大神に奉幣がおこなわれているのも<sup>25)</sup>、新宮が造営工事の段階に入ったことを伝えるものであろう。さらに同年6月、7（693）年8月、8（694）年正月と再参に工事の進捗状況を視察し<sup>26)</sup>、その間の7年2月には造京司に工事中掘り出した戸の収容を命じている<sup>27)</sup>。このような経緯をへて8年12月乙卯に天皇は新造の藤原宮に遷り、同戊午に百官の拝朝が、同己未に親王以下郡司までに賜物が、同辛酉に公卿大夫に賜宴がおこなわれている。

しかし、持統天皇が遷居した当時の藤原宮は、内裏内部の主要部が完成していた程度で、大極殿・朝堂などの中枢部分ですら未完成であつたらしく思われる。文武元（697）年8月に即位した文武天皇は大極殿で挙式しておらず、文武2（698）年正月に大極殿に受期しているから<sup>28)</sup>、大極殿は元年末ごろに完成したらしいと思われ、朝堂も『続日本紀』大宝元（701）年正月庚寅条に皇親および百寮を朝堂において賜宴したと記しているから、おそらく文武4（700）年末ごろに完成したのであろう<sup>29)</sup>。同じく『続日本紀』大宝元年正月乙亥条には

天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹鳥形幢、……………、蕃夷使者陳列左右、文物之儀、於是備矣、とみえ、藤原宮がほぼ整備されたことを示しているが、なお完成にいたっていなかったことは、同年7月に、太政官処分として造宮官は職に准ずべきことを令しており、造営工事の継続を予定していることがうかがわれるのである。

他方、京城の整備も引きつづきおこなわれていたらしく、『続日本紀』慶雲元（704）年11月壬寅条に始定藤原宮地、宅入宮中百姓一千五百五烟賜布有差、

と記されているのは、整備が最終段階にいたったことを示すものといえよう。

新益京は飛鳥浄御原令制下の京として造営が進められ、大宝律令の施行にともない、新制度下の京にふさわしい整齊の度が加えられたことを予想できるが、本来的な地理的条件の不備を覆うまでにはいたらなかったのではなかろうか。京の東部および南部の丘陵地帯は市街地としての発展を期待しえなかったし、北西にひらけた平地は湿潤で市街地として適切ではなかった。また、南に山を迎え北にひらけた南高北低の地勢は、地相において望ましい状態ではなかった。加わるに、国家体制の確立に必須の条件となった交通の利便に関しても、偏在の負を解消することは困難であった。これらの負の諸条件を克服する方策をみいだすことが新益京の経営に課せられた第一の課題であった。

#### 4 藤原不比等

『日本書紀』・『続日本紀』を通じて、藤原不比等にかかわる記載はかならずしも多くはなくまた簡潔であり、いきおい彼の政治的行動に関しては推測の域を脱しないことが多い。不比等は中臣鎌足の第2子として生まれ、藤原氏の事実上の祖として、持統朝以降廟堂の実力者として抬頭した人物であるが、藤原氏の始祖としての鎌足が、葛城皇子（天智）を扶けて飛鳥より難波へ、さらに近江へと遷都を推進した事跡は、不比等にとって特別の意義を有していたように考えられる。（藤原をふくめた）飛鳥の地の客観的地位は鎌足の時代のそれとは大きく異なっているものの、飛鳥より離脱という問題は解決をみぬままに残存しており、熟思すべきことがらであった。

不比等の持統天皇への協力は、草壁皇子の嫡系の擁護を軸として進められ、軽皇子の即位、女宮子の入内とさらに首皇子の誕生という経緯は、天皇家の外戚としての地位を築きあげるものであった。一方、天武の遺志の実現として、持統が積極的に推進したと考えられる新益京の造営に、ついで大宝律令の制定・施行にともなう新益京の整備に力を尽したことも容易に予想し得るところである。しかしそのゆえに、大宝2年、持統上皇の死に遇した不比等は、新益京時代の終焉を明確に感ずることができたのではあるまいか。新益京に対する執着より解放され、また新益京経営の限界も意識されたと考えられる。上皇の死の翌年（慶雲元年）11月に「宮中」（京内）の百姓一千五百五畑に賜物がおこなわれたのは、京の造営が最終段階を迎えた意であり、京戸に編入される百姓への優遇とも解しうるが、慶雲4（707）年2月に「議遷都事」せしめられている事実を勘案すると、造営の最終段階の意味は微妙で、完成（完了）よりもむしろ終止符を打つ（終了・打ち切り）とみるのが妥当なのではあるまいか。不比等は上皇の死後間もなく、飛鳥よりの離脱——新益京の経営を放棄する決意を固めたものと推測するのである。

慶雲元年11月以降、同4年2月までの間に、不比等を中心に遷都の計画が慎重に検討されてゆき、慶雲4年2月9日に詔が発せられる運びになったと考えられはしないか。『続日本紀』同日条は

詔請王臣五位已上、議遷都事也、

と記すが、「議遷都」とは、はじめて遷都の可否が審議される意ではなく、遷都の正式承認ないしは

決定の手続きとしての審議の意とみたいのである。然りとすれば、当然遷都の詔が発せられるのが順次であるが、それを阻んだものは文武の健康が憂慮すべき状態にいたったからであろう。病弱の文武は慶雲3(701)年11月、母に譲位する決意をいだいたほどの状態であったが、遷都が議せられて間もなくの4年6月、ついに崩じているのである。

新都の経営にふさわしい地を選定する際に、不比等が主導して平城の地に決せしめたことはほぼ確実と思われるが、不比等と平城とのかかわり合いについては不明の点が残っており、さらに検討を要すると思われる。

## 5 平城遷都の詔

先稿<sup>31)</sup>においては、慶雲4年2月に遷都のことを議せしめたが、論議の決定をみぬままに文武は崩じた、としたが、それは上述のように、遷都を決意したにもかかわらず、不予のゆえに遷都を宣する機を失したまま文武は崩じた、の意としておきたい。皇位の継承は、皇嗣首皇子が幼少のため、文武の母阿閉皇女が即位(元明天皇)したが、翌年の和銅元(708)年2月、元明は平城遷都の詔を発した。

朕祗奉上玄，君臨宇内，以菲薄之徳，処紫宮之尊，常以為，作之者勞，居之者逸，遷都之事，<sup>(心)</sup>必未遑也，而王公臣咸言，往古已降，至于近代，揆日瞻星，起宮室之基，卜世相土，建帝皇之邑，定斯之基永固，無窮之業斯在，衆議難忍，詞情深切，然則京師者，百官之府，四海所歸，唯朕一人，豈独逸豫，苟利於物，其可遠乎，昔殷王五遷，受中興之号，周后三定，致太平之称，安以遷其久安宅，方今平城之地，四禽叶図，三山作鎮，龜筮並從，宜建都邑，其營構資，須隨事条奏，亦待秋收後，令造路橋，子来之義勿致勞擾，制度之宜，令後不加，

### (参考) 大興城造営の詔

朕祗奉上玄，君臨万国，属生之人敵，処前之宮，常以為，作之者勞，居之者逸，改創之事，心未遑也，而王公大臣陳謀獻策，咸云，羲・農以降，至于姬・劉，有当代而屢遷，無革命而不徙，曹・馬之後，時見因循，乃末代之宴安，非往聖之宏義，此城從漢，彫殘日久，屢為戰場，旧經喪乱，今之宮室，事近權宜，又非謀筮從龜，瞻星揆日，不足建皇王之邑，合大衆所聚，論變通之数，具幽顯之情，同心因請，詞情深切，然則京師百官之府，四海歸向，非朕一人之所独有，苟利於物，其可違乎，且殷之五遷，恐人尽死，是則以吉凶之土，制長短之命，謀新去故，如農望秋，雖暫劬勞，其究安宅，今区宇寧一，陰陽順序，安安以遷，勿懷胥怨，竜首山川原秀麗，卉物滋阜，卜食相土，宜建都邑，定鼎之基永固，無窮之業在斯，公私府宅，規模遠近，營構資費，隨事条奏，

と『続日本紀』に載せる詔文は、すでに知られるように、隋朝をおこした高祖文帝が、開皇2(582)年、新都大興城の造営を決意して発した詔に倣ったものであり、下線を施した部分は同一ないし同意の字句を踏襲した修辭となっている。しかし、大興城造営の詔が、遷都の意義とともに遷都を必要とする理由を具体的に述べるのに対して、平城遷都の詔は、遷都の意義を述べるのみで具体的な理由についてはなんらふれるところがなく、新益京への言及もみられない。当時、遷都の理由への言及がまったく不必要なほど、衆知の事実であったとは考えにくいから、理由の明示をためらわせる、なんらかの事情が存したと想像するほかはないが、理解に窮する欠落である。なお、平城の地に関する表現

は、隋詔が竜首山川原の地理的条件に優れた点を強調するのと同じで、選地の理由に終始する内容であり、遷都の理由として述べたものとは考えにくい。また隋詔には「今区宇寧一、陰陽順序」と、積極的な時機に関する修辭もみられるが、この詔はその点にもふれてはいない。

つまりこの詔の主調は、遷都の意義ないし理念を闡明することにおかれていたと約言できよう。第7次遣唐使の一行がもたらした新知識——大興城を整備した唐長安城に関する報告——は、新益京の経営に腐心する廟堂の首脳に大きな刺激を与え、王都の意義を再認識せしめたであろう。律令体制の具体的顕現たる壮大な王都の実現は、連年の疫飢その他で国家運営に蹉跌を感じていた為政者たちに、激励と希望とを与える方策であったと考えられる。

## 6 附 言

再言をあえてするならば、遷都はまず第一に、飛鳥・藤原より離脱することを目途としたことが注目される。随唐を範とした律令体制への志向を起因として、乙巳の変に顕然化した飛鳥よりの離脱は、藤原鎌足・不比等父子に一貫する姿勢と努力によって推進されたと考えられるが、それは藤原氏が律令体制の構築の過程において、自家の独自の地歩を確立しようとする行動と一体のものであった。廟堂の一般的動向ははじめ消極的であったと予想されるが、大宝律令体制の樹立——律令官人化の進捗によって反対の空気が稀薄化した状況を、不比等は巧みに利用したのであろう。

しかし、飛鳥よりの離脱がようやく理解を得る段階にいたっても、なおいずれの地を選ぶかはまた新たな課題であった。難波さらに近江の選択が結果的に失敗と受けとめられていたとみられるので、選択の余地はかなり狭められていたと思われる。直木博士は、「飛鳥・藤原からできるだけ引き離しながらも、大和国内に求めた」とされるが<sup>32)</sup>、その指摘に従いたい。

大和国内において選定がおこなわれる場合、地理的条件とならんで歴史的・社会的条件を併せて考慮したことが当然に予想されるが、それは伝統の保持と改革の促進とを適宜に調和<sup>33)</sup>——妥協させたものであったと考えられる。

### (註)

- 1) 寺田貞吉『帝都』。
- 2) 大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』。
- 3) 坂本太郎『日本全史』第2巻・古代Ⅰ。
- 4) 林 陸朗「平城遷都の理由」(『論集・日本歴史』(2)所収)。
- 5) 八木 充『日本古代の都』。
- 6) 上田正昭『藤原不比等』。
- 7) 村井康彦『日本の宮都』。
- 8) 岸 俊男『日本の古代宮都』。
- 9) 直木孝次郎「奈良の都の歴史的位罫」(『古代を考える奈良』所収)。
- 10) 八木 充 前掲書。
- 11) 村井康彦 前掲書。



- 12) 『日本書紀』孝德紀・白雉4年は歳条。
- 13) 村井康彦 前掲書。
- 14) 『日本書紀』天智紀・称制6年3月己卯条に  
遷都于近江,  
とある。
- 15) 村井康彦 前掲書。
- 16) 『日本書紀』天智紀・称制6年3月己卯条。
- 17) 『日本書紀』天武紀・2年2月癸未条。
- 18) 『日本書紀』五年是歳条に  
將都新城, 而限内田園者, 不問公私, 皆不耕悉荒, 然遂不都矣,  
とある。
- 19) 『日本書紀』天武紀・11年3月甲午条に  
命小紫三野王及宮内官大夫等, 遣于新城, 令見其地形, 仍將都矣,  
『日本書紀』天武紀・13年2月庚辰条に  
遣淨広肆広瀬王・小錦中大伴連安麻呂, 及判官・録事・陰陽師・工匠等於畿内, 令視占応都之地, 是日,  
遣三野王・小錦下采女臣筑羅等於信濃, 令看地形, 將都是地敷,  
とある。
- 20) 『日本書紀』天武紀・12年7月癸卯条に  
天皇巡行于京師,  
『日本書紀』天武紀・13年3月辛卯条に  
天皇巡行於京師, 而宮室之地,  
とある。
- 21) 『日本書紀』持統紀・4年10月壬申条。同・12月辛酉条。
- 22) 『日本書紀』持統紀・5年12月甲子条。
- 23) 『日本書紀』持統紀・5年12月乙巳条。
- 24) 『日本書紀』持統紀・6年月戊寅条。
- 25) 『日本書紀』持統紀・6年5月丁亥条, 同・庚寅条。
- 26) 『日本書紀』持統紀・6年6月癸巳条, 同・7年8月戊午条, 同・8年正月乙巳条。
- 27) 『日本書紀』持統紀・7年2月乙巳条。
- 28) 『続日本紀』文武紀・2年正月壬戌条。
- 29) 押部佳周「飛鳥京・新益京」(『古代史論集』(上)所収)。
- 30) 『続日本紀』文武紀・大宝元年7月戊戌条。
- 31) 拙稿「隋大興城造営の詔と平城遷都の詔」(『法律論叢』60—45)
- 32) 直木孝次郎 前掲論文。  
先に喜田博士は, 「大和盆地内」と指摘しておられる。
- 33) 直木孝次郎 前掲論文